

性を大きくは考えていなかった。しかし被服をみつめれば見つめる程、衛生（広義）をぬきにしては考えられない。被服衛生学の主要性を唱えながら、今後共研究室の整備に精進してゆき度いと考えている。諸先生方の研究室だよりを拝見し、お互いの研鑽の場として利用させて戴けることを念願致します。

東京学芸大学  
教育学部家庭科教育学科  
被服学研究室

中 橋 美智子

本学は、東京都下の自然環境に恵まれた10万坪の広さをもつ武蔵野の一角にあり、四季折々の自然の美しさは一段と見事なものである。

家庭科教育学科の建物は、敷地の西のはずれにあり、その三階の隅の一室が私の研究室である。

教育学部家庭科教育学科ということもあって、家政学部のような十分な施設設備のないことが大きな悩みである。

渡辺ミチ先生が本学に御在職中、新棟建築の際予算に組み入れて設備した恒温室のあるお陰で、何とか10余年皮膚温中心に実験を進めることができた。「衣服の開口状態が人体におよぼす影響」「体型別差異による皮膚温分布に関する研究」「太陽放射による着衣の吸熱に関する研究」「紙布の実用性に関する研究」などが、皮膚温研究に関するその主な論文のテーマである。

また、予算期ごとにポリグラフの請求を出し続け、その必要性がやっと認められ、5年程前に購入することができた。お陰で身体の機能性に関する実験も着々と進めることができるようになったのが現状である。その研究としては「和装小物類の身体におよぼす影響」「打掛着衣に関する衛生学的研究」「ジーンズ着用時における機能性に関する研究」などがあげられる。

一方、特に教育学部の立場より視聴覚教材と

して研究成果および授業効果を高めるよう努力している。現在、自動焦点式スライドプロジェクター、オーバーヘッドプロジェクター、VTR機器などそろえ、常に教育研究に活用できるような体制になっている。

将来計画として、被服衛生関係では人工気候室、人体天秤、ビドスコープなど、視聴覚教育関係として顕微鏡投影機、実物投影機、テクニカラ・プロジェクターなどの機械購入の充実をはかり導入するため、学内予算および科研費などによる予算化に努力している。

〔研究教育雑感〕

—衣服圧研究によせて—

鳥取大学

伊 藤 紀 子

着心地のよい衣服を求めて衣服のゆとり量と被服材料の力学特性について研究を進めているうちにいつのまにか難問の衣服圧研究に足を踏み入れてしまった。過去の研究をみると被服衛生学領域で活躍の先輩のほとんどが衣服圧研究に関与されている。したがってその数も多く私の知る範囲の衣服圧研究に関する報文も40編近くあり、興味深い研究分野だといえる。

これらの中で興味をひかれた報文は、下腿用圧迫被服に関する報文<sup>1)</sup>と、編布の衣服圧と圧感覚に関する報文<sup>2)</sup>である。前者は、下腿用圧迫衣服のソックス、サポーター、ゲートルについて各種の運動を行わせた後の着用感、疲労感、運動能率について主観的評価と各種の生理学的実験結果より詳細な検討がなされている。その結果、非着用および低加圧力であるソックス、サポーターがゲートルに比較して運動能率も低下し、疲労感も大きいと報告してある<sup>1)</sup>。後者の報文では、伸長特性の異なる編布を上腕部および大腿部に装着し、伸長率を変化させその際に生ずる加圧力と官能量に関する結果が明示されている。圧感覚は試料の伸長特性に関係し、伸長性の大きい試料ほど圧感覚は低加圧力でき

つく感じると報告されている<sup>2)</sup>。(このことについては今後の研究課題としてある。)生活実感としても、妊娠時に締める腹帯についても手軽で低加圧力のパワーネット類よりも晒木綿の方が疲労感の少なかったことを思い出す。また私どもの実験結果では快適な日常動作時のスカート胸部において、圧力測定素子の違いはあるが腹部の衛生学的許容値 $40\text{ g/cm}^2$ をはるかに上廻る $50\sim 100\text{ g/cm}^2$ の衣服圧値を観測している。上記に関しては様々な要因も影響しているであろうが、一つには持続する圧迫力に対し、加圧力の高低のみならず加圧部位、加圧状態、加圧時の圧力変動などが生理的および感覚的にも多大な影響をもたらしていると思えばこのような立場からの衣服圧研究に妙味を感じている。

今日、被服学においては、着心地のよい衣生活を求めて、被服材料学、被服構成学、被服衛生学の広領域で様々な研究がなされている。これらの研究を進める手段として衣服圧測定が重要な役割を果していることは衆知の事実です。その衣服圧測定について、現在の主流は抵抗線歪計素子であるがそれぞれに問題点が多く、簡便でかつ精度のよい圧力測定素子の開発を願う人は多いと思う。もともと人体は凹凸はもとより硬軟、曲率など異なる複雑な構造を持っている。加えて衣服をまといかつ動作を行う。このような状態での衣服圧計測の難しさを思う時サーモグラフィーに近い装置が開発されることを夢みている今日比頃です。

引用文献

- (1)生田則子 広大医誌Vol.23, 275 (1975)
- (2)渡辺ミチ・田村照子・岩崎房子・嶋根歌子 家政誌Vol.31, 439 (1980)

共立女子大学被服衛生研究室  
神 山 恵 三

このたび、被服衛生学分野の一員として、お仲間に入れさせていただきました。わたし共は新設の研究室なので、なにから、なにまで一か

ら初めなければなりません。よろしく願いいたします。5年前、長いこと勤めていた気象研究所から、東京農工大学に移り、昨年、現在の共立女子大学の被服衛生研究室に参りました。

気象研究所は衛生気象研究室で、気象病や大気汚染の研究を、東京農工大学の環境保護学科に移ってからは主として森林の樹木から発散されるフィトンチッド物質についての研究を行ってきました。そんなわけで、被服衛生学の研究も、いままでの方法論を生かしたのから取りかかろうとしております。

なにしろこの研究室に入った当初、ガスマットグラフィがひとつあるだけだったので、被服香粧に取り組み初めました。日本人は「源氏物語」の昔から衣服に香をたきしめ、部屋に香をくゆらせるなどをして、生活感情を豊かにしてきました。最近、Esthetics の分野でも、香りの持つ重要性について問題になってきましたし、被服と香粧にももっと関心を払う必要があらうと思ひ、取り組んだわけです。

考えて見れば、香道とか、聞香といった香に対する特殊な芸能を発展させたわれわれ日本人は（江戸末期には香道は一般町家の娘の普通の芸事であった）、必ずや、世界の香粧界にも大きく貢献していくことでしょう。

さて、快適な被服を考える場合、被服の顕熱的条件のみならず被服—皮膚空間におけるエンタルピー状態、また脂質成分の状態がおおいに関係してくると思いますが、この点についても、研究していく必要を感じております。また、快適を問題にする場合、abiotic factor としての被服の効果、つまり、生体に直接的な影響を、被服自体がもってなくても、適当な条件下では、それを着用している人間の中樞神経系とその受容器を通じて、実際的な効果を持ち得るといふ被服の効果、一般的には心理的效果といわれているもの、正確には条件反射をおこす条件刺激としての被服の効果ももっと明らかにしていく必要があらうと思っております。

これは、被服のもっている二つの機能、保護と識別の中の、識別機能におおに関係してくるものと思います。同合い、色彩、ドレープ性あるいは緊張感をもった被服、amenityな被服等々、の問題は単に被服材料や機構だけの対象でなく、それらのもつ刺激が感覚受容量によって受けいられ、いろいろな神経経路に作用を及ぼし、神経活動を刺激したり、制止したりして、個人の情緒の状態に影響を及ぼす abiotic factor として、被服衛生学の対象となるはずとっております。

今年は国際障害者年にあたりますが、障害を軽減し、残有能力を開発し、心理的な立ち直りを助重するような被服の開発を、被服衛生の上からも参加する機会となっております。

先輩の皆さんに続いて、今後おおいに頑張っていきたいと思っております。

名古屋女子大学  
酒井清子

すっかり、落ち着いた色に包まれた大学のキャンパスのあちこちで読書に親しむ学生の姿、こつこつとみの音を響かせ、作品作りに熱中する学生、正に、秋は芸術の季節である。

夏の暑さから開放され、シックな装い、おしゃれな服装、個性的な着装など、一度にすべてのものを着てみたくなる季節である。

わが国では、四季の移り変りに伴って、激しい気候の変化がある。その気候や環境の中で、その季節にふさわしいおしゃれな服装をしたいといつも願っている。だからといって、ファッション性のみ重要視して、それ流行だと言い、それに飛びつき、流行が過ぎればいやになってしまう。この様な被服計画では猿真似ではないかと思う。

食物においても、人間に必要な栄養の基準量などが定められている。各食品の熱量、蛋白質、脂肪、ビタミンなどであり、食物の材料、調理法、盛り付けなどの工夫により、味付けに満足

しているのではないかと思う。

衣服も同様で、外界の気候条件に対応した快適な衣服、時代感覚に洗練された衣服、健康な衣服を着装する事を目的としていると思う。

1960年に奈良女子大学家政学部の研究員として、水梨教授の研究室に従事することになった。学生に戻った様に快適な衣服の研究に専念しようと心弾ませた。

今は御存命ではないが、先生の大柄な、ちょっと怖かったが、母親の様な眼差し、当時の事が思い出される。

当時は校舎も木造で実験する度、大変苦勞もしたが、“衣服の保温力の測定”“快適な寝具のための調査”など実験の一つ一つに若さで情熱を燃やし、遅くまで先生と語り合ったこと、また、ある時は実験で疲れた体を休めるため、外に出ると校庭を悠悠と歩いている鹿の姿にホッとした安堵を覚え、また実験をする事に勇気を与えられたなど書き尽くせないほどである。

実験の折り、先生が御自分のお子様達を人体実験によく使われていたので、大変だなあと感心していた私が先生と同様、子供達をよく人体実験の被験者に使った。“猫にかつおぶし”のことわざの様に子供達を実験に使う時、協力する事をよく言い聞かせて始めるのだが、実験が長びくと嫌がり、測定の時、子供の皮膚に銅・コンスタンタン熱電対温度計の受感部を皮膚に密着する場合の絆創膏で固定した箇所が赤くはれあがって実験を中止したり、何回も失敗したりした。その度に私の方が苛立ちを感じる事もあった。しかし、その実験を何回も重ねている間に、心の落ちつきを発見し、人間性をみがいしていく機会を得た事も多々あった。

実験に使った子供達も成長しているが、当時のことを子供達は「実験中は、母親の顔が鬼の顔に見えた時もあった。」と語っている。その子供達は今だに被験者に使っているが、私の良き協力者である。

今後も人体実験を使う研究も続くことだろう

が、第二の皮膚とも言える衣服を快適な、着心地の基礎資料になればと思い、頑張りたいと願っ地のよい衣服作りのために少しでも役立ち、そ ている。

〔事務報告〕

昭和55年度 収支決算

収 入		支 出	
項 目	金 額	項 目	金 額
前年度繰越金	73,581	講師謝礼 @25,000×2	50,000
学会本部より補助金	50,000	部会報印刷費	68,000
部会費 @2000×41	82,000	幹事会費	17,450
55年度 @1000×4	4,000	総会運営費(アルバイト)	13,600
54年度 @1000×2	2,000	総会運営費(会場費)	14,680
参加費 @300×8	2,400	郵送料	520
雑収入(懇親金残)	5,217	雑費	520
利息	2,639		
収入合計	221,837	支出合計	164,250
		次年度繰越し	57,587
		差引残高	0

昭和56年度 予 算

収 入		支 出	
項 目	金 額	項 目	金 額
前年度繰越金	57,587	講師謝礼 @25,000×1	25,000
本部より	50,000	部会報印刷費	75,000
部会費 @2000×70	140,000	幹事会費	20,000
利息	2,500	総会運営	13,000
		郵送料	25,000
		雑費	2,000
収入合計	250,087	支出合計	160,000
		次年度繰越金	90,087

1. 幹事会の開催

日時：9月27日 PM5:00～8:00

場所：文化女子大 被服衛生学研究室

議題

- (1) 役員の改選について
- (2) 総会について
- (3) セミナー開催計画について
- (4) 科研費申請について

2. 第3回被服衛生部会総会・講演会開催

日時：昭和56年9月28日(月)9:30～15:30

場所：文化女子大学

出席者

- (1) 講演 9:30～11:00  
講師 国立身体障害者リハビリテーションセンター  
診療部長 初山泰弘
- 演題 身体障害者の生理機能について
- (2) 総会 11:00～12:00

司会 弓削 治